

えんがわ通信

ぬいぐるみ作りの輪広まる

CW(コミュニティ・ワーク) 手仕事プロジェクト

ぬいぐるみ作りの輪が、仙台市内の被災者の間で広がりをみせている。1個500円の買い取りで収入につなげてもらおうと、一般社団法人パーソナルサポートセンター(PSC)コミュニティ・ワーク創出事業部が2011年12月16日に太白区あすと長町のコミュニティ・ワークサロン「えんがわ」で始めたプロジェクトの参加者は、宮城野区扇町の仮設住宅などに住む主婦らにも広まり約2カ月半で、のべ74人に達した。担当者は「どんな友人や近所の方に呼びかけてもらい、作り手同士の輪が、広まればうれしい」と話している。

2カ月で750個製作

2月上旬の屋下がり、宮城野区扇町4丁目の仮設住宅集会所で、4人の女性が作業机に向かい、真剣な表情でぬいぐるみの生地を糸を通す作業をしていた。「どう慣れた?」短い会話ながらも、作り手同士で気遣いながら一つひとつ丁寧にぬいぐるみを仕上げる。製作を始めてまだ数日という女性は「作業の様子を見て、是非、やってみたいと思っただけです。みんな話をして作業するのは楽しいですね」と笑顔で話した。PSCコミュニティ・ワーク創出事業部ではこれまで、作り方を説明す

るワークショップを「えんがわ」や扇町1丁目の仮設住宅集会所などで計3回実施。作ってもらったぬいぐるみは定期的に、買い取りを行い、2月7日現在、74人の参加者が約750個のぬいぐるみを作り上げた。参加者はプロジェクトを開始した当初、仮設住宅の入居者だけだったが、口コミでその輪は拡大。民間のアパートなどの賃貸住宅に住む「みなし仮設住宅」の入居者も加わるようになった。

絆深まり製作に意欲

震災で自宅が壊れ宮城野区岩切のアパートに夫と身を寄せている関内孝子さん(61)も友達の紹介で製作に加わった1人。扇町1丁目の仮設住宅に住む友人の斎藤ともさん(61)の誘いで、昨年12月26日に扇町1丁目の仮設住宅で行われたイベントに参加したのがきっかけで、二人はぬいぐるみ作りに没頭するようになった。旅行に出かけるなど大の仲良しだったが、東日本大震災後は、顔を合わせる機会がめっきり少なくなっていた。ぬいぐるみ作りをきっかけに再び、定期的に顔を合わせる事ができるようになったという2人。関内さんは「今後もさまざまなジャンルの裁縫に挑戦していきたい」、斎藤さんは「これからもみんなとつながっていたい。ぬいぐるみなどの手仕事、そのきっかけになれば」と話している。



真剣な表情でぬいぐるみを作る仮設住宅の入居者
=2月2日午後、宮城野区扇町4丁目の仮設住宅集会所

「えんがわ」な人々②
杉館邦彦(すぎたてくにひこ)

「えんがわ」な人々②
杉館邦彦(すぎたてくにひこ)

被災地を語る①

被災者の方々に寄り添う
NPO、NGOの頑張りが、
被災地を復興していく上で大事。
私たちがその一翼を担いたい。

(有)ビッグイシュー日本
佐野章二 代表



仙台にいるビッグイシューの販売者は震災直後、すぐに炊き出しを手伝っていました。考えてみたら販売者は、失うべき家が被災前からない人たちで、そういう事態に強い人たちだったんですね。彼らの取り組みがきっかけとなり、ビッグイシューでは震災後、東京の販売者とともに被災地にボランティアに出かけ、支援活動を展開するようにになりました。昨年5〜8月には、石巻市蛤浜でがれき撤去のボランティア活動を展開。支援団体をバックアップするため、せんだい・みやぎNPOセンターにもスタッフを派遣

しました。被災地で活動する団体を支援しようと雑誌でカンパも呼びかけました。

しかし、東日本大震災では12万世帯の人が家を失い「ハウスレス」になる甚大な被害が出たわけですね。家屋などのハードのみならず、経済や地域の社会システムそのものも大きな打撃を受け、一年たっても多くの方がまだ、将来を見通せず大変悩んでいると思います。そのような中、特例的に延長されていた雇用保険の失業手当の受給が1月中旬から順次、切れ始めました。国は今後、延

長はしない方針で2月末までに、宮城県を含む被災3県で最大40000人の失業手当の給付が終わる見通しだそうです。厳しい状況ですが、そのような状況でも東北最大の都市仙台で被災者が路上生活を余儀なくされる事態だけは避けたいと思っています。そのため私たちが、しっかりと路上で見守りをしていきたいと思っています。仮にそのような生活をせざるを得ない人が出てきてしまったら、しっかりと話を聞いて、予防策を講じていきたいと考えています。

同時に、雑誌のほか、新たな被災地関連の媒体を作って震災を忘れないよう対外的に訴えていきたいとも思っています。そのような活動を通じて、被災者の方々のサポートしているNPOや団体を知ってもらい、企業などからカンパも募れるような仕組みにしたいと考えています。

今後、誰が被災地を元気にするかを考えたとき、地域社会をポジティブにする市民団体に、重要な役割を担ってほしいと思っています。経済、行政が大きな打撃を受けた今回の震災で、東北の一番の強みは「絆」なんだと思います。しかし、それを支える歴史的なコミュニティも被災しました。近隣の人たちが助け合うことも、もちろん大切ですが、被災者の方々に寄り添うNPO、NGOが頑張ることが、被災地を復興していく上で大事になってくるのではないのでしょうか。私たちがその一翼を担うことができればと思っています。

さの しょうじ 1941年大阪市生まれ。2003年5月から現職。同年9月、ホームレスの仕事作りを目的に雑誌「ビッグイシュー日本版」を創刊。現在300円で販売され、160円が販売者の手に渡っている。8年間で481万冊を販売。6億5266万円がホームレスの人に提供された。



JR長町駅・地下鉄長町駅から徒歩7分

「コミュニティ・ワークサロン「えんがわ」までのアクセス」

東北ニュービジネス大賞表彰

PSCが大賞受賞

東北の企業経営者らで組織する東北ニュービジネス協議会(会長・大山健太郎アイリスオーヤマ社長)は革新的な起業経営者をたたえる「東北ニュービジネス大賞表彰制度」の受賞企業や団体を選び、一般社団法人パーソナルサポートセンター(PSC)が「ソーシャルアントレプレナー大賞」を受賞した。

ソーシャルアントレプレナー

PSCは2011年3月、社会的困窮状態にある人たちに、寄り添い、伴走型の支援をするなどで、自立を実現してもらおうと、ホームレス支援に取り組み「ワンファミリールー」(青葉区)など、さまざまなNPO法人や団体が連携して設立された。東日本大震災後は仙台市と協働で、仮設住宅入居者の見守



賞状を受け取るPSCの立岡学理事

りや就労支援などに取り組んでおり、地域への貢献などが評価された。

青葉区の勝山館で1月24日、開かれた表彰式で、大山会長は「社会起業家として優秀性、革新性、地域への貢献は広く他の事業家の範と認められる。成長を期待する」と述べ、PSCの立岡学理事に表彰状を手渡した。

立岡理事は「仙台市の仮設住宅に入居されている方の安否確認、見守りを毎日緊張の中で、続けている。今後復興に向けて仕事づくり、雇用拡大が重要になる。段階的就労のスキームを作っていくたい」とあいさつした。表彰式ではPSCのほか、山形県寒河江

市の「佐藤繊維」が東北ニュービジネス大賞、岩手県盛岡市の「ホップス」が東北アントレプレナー大賞、宮城県登米市の津山木工芸品事業協同組合が奨励賞を受賞した。

あすと長町仮設で羊毛にこまる作り

太白区あすと長町の仮設住宅で2月6日、羊毛を丸めて作る「こまる」にこまるの製作ワークショップがあった。にこまる関連のワークショップは、今回で2回目。クッキー作りのボランティアなどに携わる同区の主婦の指導で、仮設住宅に入居する6人の参加者が「かわいい」「癒される」などと会話を交わしながら、計60個を製作した。今回作った「こまる」は、今後は、東京府内などで販売される見込み。

仙台市子育てふれあいプラザ「のびすく仙台」イベント情報(3月)

子育てを応援する施設です！好きなときに好きなだけ遊んでいけるオープンな空間です。入場料等はありません。どんなところか、まずはお子さんと一緒に遊びにきてください。

- 利用できる人 主に乳幼児とその家族
- 住所 仙台市青葉区中央2丁目10番24号(仙台市ガス局ショールーム3階)
- 問い合わせ TEL:022-726-6181 FAX:022-214-5071
- 開館時間 9:30~17:00(託児室は16:30まで)
- 休館日 月曜日、祝日の翌日、年末年始
- ※他のイベントに関しては、「のびすく仙台つうしん」またはHPをご覧ください。

「えほんの森～おんちゃんと今日も遊ぼう～」

- こどもだけじゃもったいない！えほんの楽しさをパパやママと一緒に体感しましょう！
- 日時：3月3日(土)
- 場所：のびすく仙台こどもひろば
- 講師：吉成信夫さん(森と風のがっこう コーチャー)
- 対象：乳幼児とその保護者
- 定員：15組
- 参加費：無料

託児付「乳幼児のための救命救急講座」

- 心肺蘇生法やAEDの使い方や乳幼児のヒヤリドキリの対処のしかたを学びます。
- 日時：3月7日(水) 13:00~16:00
- 場所：のびすく仙台
- 講師：青葉消防署員
- 定員：20名

(子どもと一緒にの参加は不可です)

※講座開催時の託児は、のびすく仙台託児室で、生後6ヵ月～未就学児を対象に行います。定員は10名で、託児料は1000円(震災で自宅に住めなくなった方は無料です)。オムツ、着替え、おしりふき、ビニール袋、子どもの飲み物(水またはお茶)をお持ちください。

Piccolo Room (ピッコロルーム) 子ども一時預かり募集

専門の研修を受けたスタッフが最短で2時間から、お子さまをお預かりいたします。東日本大震災でひとり親となった方などは、状況に応じて託児料の50~100%の減免を受けることができます。

- 利用時間：午前8時半～午後6時半(時間外は要相談)
- 託児対象：未就学児(おおむね生後6ヵ月～)
- 託児料：1時間700円
- 申し込み：利用日の3日前までに
- kodomo_katei_sien@yahoo.co.jp または FAXで022-279-2883に「託児登録希望」と書いて申し込みください。

「えんがわ」のつばやき

湯気の向こうに つながる笑顔

できあがり知らずのメロディが鳴った。緊張しながら大きな蓋(ふた)を持ち上げると、勢いよく湯気が立ちのぼる。大きなしゃもじですくい上げ、きらきらと輝くご飯をばくり。「みなさん、手をとめてお昼にしましょう！」

昼食の合図を聞くと、参加者の間に緩やかな空気が流れた。ひとり、ふたりと、食事の場所に集まり、会話をしみながら、ご飯を食べる。「おいしーわ」。そんな一言とともに見せてくれる参加者の笑顔が、私たちに何よりの褒美だ。

「えんがわ」では、クッキーやぬいぐるみなどの製作体験イベントの他に、郵便物の封入作業を定期的に行っている。年齢や性別を問わず、みんなで協力して作業してもらい、少しでも収入につながる機会が提供できれば、そんな想いで、作業をお願いしている。

参加者は仮設住宅に住む人がほとんど。出身地は市内中心部、県沿岸部、県外と広範囲で、参加の理由は「収入のため」「人と会うのが楽しくて」とさまざま。そんな方々が一堂に集い、交流しながら、ともに汗を流す場として開所から4ヵ月、封入作業はすっかり、「えんがわ」の恒例イベントになった。

カレーやポトフ、きりたんぼ・・・。昼食のまかないは「えんがわ」のスタッフが

仕事を終えてから、夜遅くまで下ごしらえをして提供している。手づくりのこだわる理由は、参加者の笑顔が見たいから。初めのうちは遠慮がちだった参加者も、今は台所で、配膳や洗いのものを手伝ってくれる。手作りの料理に箸(はし)を運びながらの会話は弾む。レシピの話、好きな食べ物の話・・・。時には味つけのご指導も(笑)。

だが、調理士でも栄養士でもないシロウトの私たちに、それが嬉しい。

えんがわで使っているお米は無農薬、無化学肥料で丹精込めて作られた有機米。山口県岩国市の農園から届いた。ご縁あって私たちがいただき、「えんがわ」で大活躍している。

先日、どうしても「ありがとう」が言いたくて、お米の提供元である化粧品会社「あきゆらいず美養堂」(東京都三鷹市)に足を運んだ。迎えてくれたのは代表の女性含む4名の社員。「えんがわ」の昼食の様子を伝えると、彼女たちに、喜びの笑顔が溢(あふ)れた。

そこにあつたのは「おいしいお米で笑顔になってほしい」という、彼女たちの想いが実った喜び。誰かの笑顔は、誰かの笑顔の源になる。そう肌で感じた瞬間だった。

みんなの想いを笑顔でつなぐ。「えんがわ」の役割を、ここにも見つけた。

(す)